
理有 炎天の刀を持つ少女

如月 理有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理有 炎天の刀を持つ少女

【Nコード】

N8599X

【作者名】

如月 理有

【あらすじ】

紅那ノ国こうなのこくの民は長年の圧政に苦しんでいた。その最も端に位置する村で、姿峨しながは理有りあという少女に出会う。

理有はあちこちを放浪しながら、様々な人々に出会い、己の定めを知り、やがては革命を望むようになる。

炎天の刀を持つ少女の神異記。

<序章>

<序章>

夜闇の中で、そこはまるで明るい星のように輝いている。たくさんの提灯と真ん中には大きなかがり火があって、人々のざわめきと太鼓の音が風に乗って流れてくるようだ。その中に、人々の楽しいげな笑い声が聞こえたように感じて、理有はギョツと目を瞑った。

夏も過ぎ去り、夜風も大分冷え込んできている。ぼろぼろになった衣を一枚身にまとっただけの、5歳くらいのこの少女は、見ればがりがりにやせ細っていた。その裸足は、山の中を何日かさ迷い歩いてきたようで、傷つき血がにじんでいた。もう、一歩も歩ける気がしなかった。

(おなががすいた……)

理有は鳥肌の立った腕で、膝を抱え込んだ。やっと見つけた村だった。そこへ行けば、食料が手に入るだろう。けれど、ここまで来て理有は、進む意欲を失った。村はどうやらお祭りのようだ。だが今の理有にとつて、それは遠い夢の中の出来事のように感じられたからだ。

(とおい、とおい世界の、おはなし)

まぶしい。理有は心の中でつぶやいて、その手で村を隠そうとした。提灯の明るさが目に痛かったのだ。けれど、村の明かりは、理有の小さな手の隙間から漏れ出してしまった。トン、トントン。太

鼓の音が、風にのってやって来る。

トン、カ、トンカカ。

芒^{すすき}が揺れる 穂^{こがね}が揺れる
実^{こがね}る実^{こがね}るよ 黄金^{こがね}の海だ
さあ 娘^{こがね}たち 舞^{こがね}い踊^{こがね}れ
白^{こがね}い女神^{こがね}が来る前に ああ
風^{こがね}とともに来る前に……

< 第1章 > 如月姿峨

< 第一章 >

扉を開けて、ふたりの男が入ってきた。異国風の黒ずくめの格好で、顔を頭巾で隠しており、いささかうろんな男たちだったが、周りの客も亭主も気にしなかった。なぜならここアシロ村は、それなりに豊かで活気があり、外から来た人間に対しても寛容だったからだ。（それは、山のふもとというよりも山の中にあるといった感じの小さな村にしてはめずらしいことだった）

アシロ村には、この山を越えてイギナという港町へ向かう商人などがよく立ち寄っており、人々は外から来た人間に慣れていた。もちろん、少し離れたところには街道があったが、国の境目となる関門があり、訳ありの人々はこの村から山越えをすることを選んだのだ。

亭主はこの人達もそういった類の人なのだと思つと、注文を訊ねた。そのとき、酔った若者のひとりがいきなり立ち上がり、大声で歌いだした。

「ケツが揺れるぜ 胸も揺れる

酒だ女だ 祭りの夜だ

さあ 娘たち 舞い踊れ

白い夜明けが来る前に ああ

恐いおつ母ちゃんと来る前に」

黒い頭巾をかぶった男の一人が、それを聞くと顔をしかめながら、

銅貨を数枚出した。「ビールを」

「はいよ」と亭主は返事をする、ダン、とジョッキを二つおいた。後ろでは、さつき歌っていた若者が、周りの若者達に「なんだ、おまえいまだに母ちゃんが恐いのか」などとからかわれていた。

適当なテーブルに腰を下ろした黒ずくめのひとりが、頭巾を下ろした。現れた顔は意外と幼く、少年から若者になったばかりというようだった。16・7歳といったところか。明るい茶色の髪に色素の薄い瞳、そして端正な顔立ちに不快な表情を浮かべている。

「まったく、騒がしすぎますよ。よりもよって祭りの日に当たってしまったなんて。ねえ、如月さん」

如月さん、と呼ばれた男は頭巾を下ろさず、うなずきもしなかった。ただ腕組をして、何かを考え込んでいる様子だ。目の前の若者は慣れているらしく、話しかけるのをやめてビールに口をつけた。だがまたすぐに喋り出す。

「アチツ！ 如月さん、このビール熱すぎますよ。何ですかこれは！ もう……」

彼の名前は如月姿峨きねのしながといった。また、目の前の若者は侑ゆきという。

姿峨は黙ってビールに口をつけてみた。ああ、うまいなと思った。

「どうですか？ 味は？ 感想は？」

ぐっと身をのり出して、侑が訊ねてくる。まるで、侑が造ったみたいだなと思いつながら、姿峨は正直に

「うまいと思っぞ」

といった。

「そうですか、やっぱり！……いや、俺がやっぱりっていうのもおかしいか。あれ、でもじゃあなんていったらいいんだろう。嬉しいですか？ お口に合って何よりで？？」

侑がひとりつぶつぶつと何かつぶやいているが、姿峨は一切気にせずに店の中を見回した。

店では、あいかわらず騒いでいる若者達に、周りの客が「そんなに娘がいいなら、外に出て探して来い！」といい始めた。彼らも祭りの日なので多少は寛容だったが、いうことはもつともだった。「ええっ」と渋る若者達は、便乗した周りの客にも「そーだ、外いつてこい」といわれ、にやにやする大人たちによって店から追い出された。祭りは既に終わっていたが、村は余興に包まれていたので、外にはまだあの若者達のような人がたくさんいるのだろうと予想がついた。

その瞬間、ガシャーンという音と共に、人々の悲鳴が上がった。いきり立った怒鳴り声もする。どうやらこの店のすぐ前で起こっていることのようなのだ。周りの客も、なんだなんだと立ち上がった。

喧嘩か。と、姿峨は予想をつけた。ひとりが店から出て行き、それに釣られて何人もが野次馬をしに出て行った。侑も立ち上がったきよるきよるとしていたが、姿峨が落ち着いた様子でビールに口をつけるのを見ると、再び座った。そして、脱力した様子で腕に頭をのせた。

「ハアー、やっぱり騒がしいですね。さすがは如月さん、微動だにしないし」

姿峨は、この若者に好感を抱いていたが、思ったことをすぐに口にしすぎるところが問題だと思っていた。そのとき、外の怒鳴りあう声が聞こえた。

「このっ、くそガキが！ 泥棒猫め！ どこから来やがったんだ！」

「ハンツ、どうせ親に捨てられたんだろう？ ああ、可哀想に、なあっ！！」

ドカ、ボクツと殴打する音が聞こえる。さらにその周りから、やつちまえといったはやし立てる声がある。姿峨はまゆをしかめた。外からさらに声がある。

「うるさいっ！ ぼくは捨てられたんじゃない！ 放してよ！」

気になった点はひとつ。

「子どもか」

姿峨はビールを置くと、ゆっくりと立ち上がった。侑はその動作で察したようで、ぐだっていた体を起こすと、何もいわずについてきた。

外に出ると、かなりの野次馬が集まっていた。そして、野次馬に囲まれた中で、数人の大きな子どもたちが、小さな子どもを集団でいたぶっていた。周りの大人たちはざわついていて、止めようとする者はいなかった。むしろ煽り立てる者さえいる。どうやら、こ

の村の子どもではないらしい。

「うるさいだと？ よくもその口でいえるな！ 泥棒猫の分際で！」

そのとき、小さい子どもが殴られながらも、目をきつく見開いていた。

「財布くらい、ちゃんと自分で管理できないのが問題なんだろ。なんでもかんでもお母ちゃんに頼ってるからだ」

見た目は5歳ほどだろうか。随分と、歳のわりに大人びた物言いをする姿は思った。

それは、あまりのことに、周りの子どもたちは一瞬口をあんどりと開けて、殴る手を休めてしまったほどだ。しかしそれは直後に、二倍の威力となって小さい子どもに降りかかることになった。

「なんだと!？」

「この、生意気な!!」

そこには、さっきまでのいたぶって遊ぶような影はなく、子どもたちの目は本気でいきり立っていた。舌を嚙んだらしく、殴られている子どもの顔面に赤い血が舞った。

「そこまでだ」

<第1章> 如月姿峨（後書き）

評価、感想、ビシビシお願いします!!--><

政府の、犬

姿峨しながはそういうと、殴っていた子ども腕をひねり上げた。子どもは、なにすんだよ！ と騒いで暴れたが、姿峨はあっさり押さえつけてしまった。そして、同時に空いているほうの手で短刀を掴むと、他の子ども達の方へと突きつけた。今まさに姿峨に飛びかかろうとしていた子ども達は、驚いて動きを止めた。本当なら、今押さえつけている子どもを人質にでもとって脅せば最も簡単だが、子どもの喧嘩程度ですることではないと、さすがの姿峨も考えた。

「侷ゆき」

姿峨はつぶやくと、いまだに壁に寄りかかったまま突っ立っている、小さい子どもの方を顎でしゃくった。指示を理解した侷は、その子どもの方へ寄って行くと、しゃがんで目線を合わせた。

「怪我はだいじょうぶかい？」

それは優しい声音だった。警戒心が薄い。優しいやつだ、と姿峨は心の中で肩をすくめた。

「え？ ……ううん、だいじょうぶ」

子どもが、かわいらしく頷いた。まるで、さっきまでとは別人のようだった。それを見て、姿峨の心にある疑念が浮かんだ。

しかし、それを掴む前に、自分が押さえつけていた子どもが動いた。完全に、よそ見をしていた不意をつかれたのだ。姿峨は心の中で舌打ちをした。子どもだと思って、油断していた。だが、しよせ

ん子どもがでたらめに手足を振り回しているだけ。姿峨は余裕で全ての攻撃を受け流し、再び身動きが取れないようにした。そのとき、腰に差していた短刀の一本が抜け落ち、カン……と音を立てたが、姿峨は気にしなかった。

はっ、と後ろで息を呑む音がした。

「お、お、まえ、達はっ」

高い子どもの声。

「どうしたんだい？」

侑の訊ねる声。

一瞬の空白。そして、空気が割れるような緊張と衝撃。次の瞬間、いじめられていた小さい子どもは叫び声を上げていた。

「触れるな！ 政府の犬が！」

ざわつと野次馬がざわめいたのを感じた。

（政府の、犬ね）

姿峨は苦い思いに顔をしかめた。

「な、なぜ、そんな。どうして分かった？」

訊ねる侑の声もだいぶん動揺している。ふと、姿峨は思い当たった。

「その、短刀のもようが……」

やはりか、と姿峨は思った。さっき、姿峨が腰から落とした短刀にはある紋章が入っている。だが、まさかこんな子どもが知っているとは。意外だった。

「政府の犬って、まさか」

誰かがつぶやいた声がした。野次馬達の視線が、姿峨と侑にふりそそぐ。それは決して快い視線ではない。敵意のこもった視線だ。

「そう！ おまえ達のせいで、僕はこんな目にあってるんだ。親を返してよ！ こいつらが裏でいつたいどんなことをしてきたか。じやまな人間と見ればすぐに殺して、人々を恐がらせて。こいつらが悪いんだ、ぜんぶぜんぶ！ 政府のいいなりになって、いくらでも人を殺す悪党達なんだからっ」

「黙れ！！」

何が逆鱗に触れたのか。姿峨は自分でも驚くほど頭にきていた。小さい子どもに飛びかかると、腰に差した刀を抜きざまに切りつけた。

(！ 避けられた？)

だが、所詮子どもが、鍛錬を積んだ姿峨に勝てるはずもなかった。ほんの2・3秒で壁に追いつめると、姿峨は子どもを見下ろした。

そうして初めて、頭から水をかぶせられたように姿峨は冷静に戻

った。それは来たときと同じようにあつという間の出来事だった。目の前で吼えていた子どもは、ほんの小さな子どもだった。斜め後ろで、侑が面喰らっているのが分かる。群集がざわめき立っている。姿峨は再び子どもを見下ろした。子どもは姿峨が見て初めて、その顔に恐怖を浮かべていた。そこから首筋に目を落とし、子どもが何かを首に下げているのを見つけた。それはなんでもない革紐だった。にもかかわらず、姿峨はなんだか胸騒ぎを感じてその革紐に手をかけた。

「あつ」

子どもが叫び声を上げる。姿峨はかまわず、それを子どもの首から奪い取った。「返してよ！」

姿峨は子どもの抗議を片手で制すと、革紐につながっていたものを見て眉根を寄せた。それは大きめの勾玉だった。くすんだ緑色をしている。

ふう、と息を吐いた。確信していた。こいつは、ただの子どもと違って、見過ごしていいものではない。

姿峨は勾玉をポケットに入れると、子どもをじっと見下ろした。子どもは、姿峨の足にむしゃぶりつき、殴ったり引っかいたりしていた。

「大事な物のようだな。返してほしかったら、ついて来い」

姿峨はそういって、その場を後にすることにした。子どもがすぐ後ろについてきた。少し間があつてから、侑があわてて追いかけてきた。その場に置きざりにされた群集は、しばらくの間、身動きを

とるにすらできなかつた。

政府の、犬（後書き）

評価・感想、ビシビシお願いします！><

鳥

姿峨しながは村を出ると、森を歩き続けた。あと一日も歩かず、森を抜けることができるだろう。

後ろを子どもがついてきているのは知っていたが、あえて気にしない振りをしていた。まるで存在しないように無視を決め込んだのだ。小さい子どもには酷な仕打ちだろうな、という思いもかすめだが、姿峨はそんなことを気にする人間ではなかった。次にこの子どもにどう接するかを決めるには、まず、これからこの子どもをどうするかを考えなくてはならなかった。

夜も更け、暁ばかりになる頃に、姿峨はようやく足を止めた。森を抜けたすぐふもとには、アシロ村よりも大きな村がある。そこには夕方に着けば良かったので、その前にここで一度休息を取ることにした。

「侑ゆき、ここで休憩だ」

一晩ぶつ続けで歩いたので、侑はさすがに疲れた表情をしていたが、その言葉に元気よく頷くと、早速準備に取りかかった。雨が降る様子はなかったが、侑は二本の若木を寄り添うように結び付けると、口早に祈りの言葉をつぶやいてから、近くの木から枝を切り落としてきた。それを若木の周りに積んで、泥と落ち葉で簡素な屋根をつくると、簡素な家が出来上がった。

姿峨はその間に、水袋に水を入れに行き、帰りに弓矢で鳥を一羽狩るのに成功した。そして、家に着いたとき、鳥はまだ生きていた。姿峨は鳥の首を落とそうとしたが、急に手を止めると、少しためら

った。

(いや、あいつにやらせてみよう)

心を決めると、姿峨は短刀に手を伸ばす代わりに、懐に手を入れた。取り出したのは、勾玉だった。姿峨はそれを手に乗せ、もう一度じっくりとながめる。脩が起こしたたき火の光を反射して、勾玉はキラキラと光った。くすんだ緑は深い色をしていて、見方によって、また場所によって色が若干異なった。

魅入られそうになるのをこらえて、姿峨は顔をあげた。この勾玉が「あれ」であるのは間違いだらう。不可解なのは、なぜこれを、あんな子どもが持っていたかだ。姿峨は目を細めて子どもを見た。子どもはたき火の光が、ぎりぎり届くか届かないかのところにしゃがみこみ、こちらをじっと見つめていた。姿峨は、ふん、と鼻を鳴らした。ひとつ、あいつを試してみよう。

「ほら。これを返して欲しかったんだらう?」

姿峨は無造作に、ぽいっと勾玉を放った。子どもは大事なものを無造作に扱われて、かなり慌てたようだったが、心配ない。勾玉は一切の狂いなく、しっかりと子どもの手の中に落ちた。子どもは、ほうつと安心したように息をついた。

「ちょっと、こっちに来て」

手招きをするが、子どもは警戒した様子で近寄ってこない。イライラした姿峨は、「来い!」と、有無をいわさぬ口調でいった。子どもはびくりとふるえると、勾玉を両手でしっかりとにぎって、おそるおそる近寄ってきた。近くまで来ると、姿峨は「座れ」といっ

た。子どもは、姿峨の手が届く範囲に入らないように用心しながら座った。たき火の炎が、子どもの頬を照らした。姿峨はそこで、初めてこの子どもが少女だったことに気がついた。今まで、その口調と振る舞いにだまされていたのだ。けれど、今さら女の子だろうと大して違いはない、と姿峨は考えた。あえて上げるなら、この先訓練することがあったときに、男子よりも体力が劣るのが問題か。姿峨は子どもをじっと見据えていった。

「おまえ、鳥をさばいた経験は」

「ある」

子どもは、ちらつと姿峨を見上げた後、ぶすつとした調子でいった。

「やってみる」

姿峨はそういうと、子どもの前に鳥と短刀を置いた。そこへ、侑が

「なになに、子どもにやらせてみるんですかー？」

と、興味をしめしたらしく、近寄ってきた。子どもの近くにしゃがみこみ、じっくりと見る体制になろうとした。しかし、そこでいきなり、侑が素っ頓狂な声を上げた。

「え、ええ！？！？ うそ！！」

姿峨はため息をつきながら、一体どうしたんだと訊ねた。

「き、如月さん、大変です！ この子、この子女の子ですよ！」

姿峨はその返事を聞き、眉間をゆるめた。ああ、なんだそのことかと思った。

「それがどうかしたのか？」

「ええ！？ どうかした、って……。どうかしたって、いや、大問題ですよ！！」

「いや、だから何が大問題なんだ」

侑はまだ何かいつている。だが、姿峨は（まったく……）と思うと、目の前の子どもに視線を戻した。子どもは当惑している様子だった。けれど、姿峨が先をうながすと、文句をいたげに見あげてきたので、にらみ返してやった。しぶしぶといった様子で、子どもがゆっくりと鳥に手を伸ばす。そして、触れたところで、びくっと体をふるわせて手を離れた。

「……あつたかい」

姿峨は肩をすくめた。

「そりゃそうだろう。さっき狩ってきたばかりだ。まだ生きているらう、と子どもがうめいた。

「やったことがあるんだろう、さっさとやって見せてみる」

わざと突き放すようにいうと、子どもは短刀を手ににぎった。しかし、その手は頼りない。鳥が最後の力をふりしぼって、ばたばた

とあばれた。子どもは悲鳴をあげて、鳥から手を離した。だが、姿
峨は何もいわずに、見守ることにした。

子どもは、悪戦苦闘していたが、やがて鳥の首をつかむと、短刀
を押し当てた。そして、力を込める前に大きな声でいった。

「日の神月の神、森の神々よ。この鳥の魂がどうか安らかに眠らん
ことを！」

短刀は鳥の首をすぱりと切り落とし、鮮血が飛び散った。子ども
は、痛みをこらえるように顔をゆがめていた。

(日の神月の神、森の神々、か)

姿峨は子どもの祈りを心の中で反すうしていた。それは、この
ところ聞かなくなった、古い祈りだった。

子どもは、鳥の足を持つと、逆さにして血が抜けるのを待った。
抜け切ると羽をむしり取り、それが終わると内臓を抜きにかかった。
姿峨は手伝おうとしたが、子どもに断られた。慣れてはいないよう
で、子どもの作業はのろく至らない点多かったが、けっきょく、
子どもは最後まで一人で鳥をさばききったのだった。

日はすでに昇りきっていた。子どもは川に手を洗いに行っている。
姿峨はたき火で熱くした石を使って、皮の袋で調理をしていた。こ
こまで来る間に摘んだ山菜と子どもがさばいた鶏肉を使って、シチ
ユーをつくるつもりだった。そこへ、子どもがいない隙を見計らっ
て、侷が声をかけてきた。

「すごい子ども……でしたね」

そうだな、と姿峨はいった。

「気に入ったのですか？」

「ああ。見込みはある。月影の館に連れて行って、鍛えようと思う」
それに、勾玉のことも気になるしな、と姿峨は心の中で付け足した。なんにせよ、いろいろと気になる子どもだった。

子どもが帰ってきたころには、シチューはいい感じに出来上がっていた。いいにおいが辺りにただよっていて、空腹のお腹に食欲を誘った。さらに、もも肉を串に刺してたき火で直接焼いていたのだが、それがキツネ色になって脂をしたたらせているのがたまらなかった。3人は口々にいただきます、と感謝すると、食事に取り掛かった。木の器によそったあつあつのシチューも、鶏肉のうまみがよく出ていた。子どもも、ほっぺを赤くしておいしそうに食べていたのを覚えている。

食べ終わると、3人はすぐに横になった。子どものぶんの紙子*はなかったので、自分の分をゆずると、姿峨は丸くなって寝ころがった。寒かったが、眠れないほどではなかった。眠りに入る直前、姿峨は子どもの名前を聞き忘れたなあとぼんやりと思った。

運命の齒車が、かちりと音を立てて回り始めたような、何かが始まる予感があった。

鳥（後書き）

*紙子・・・紙子紙という和紙で作った衣。保温性にすぐれる。奥の細道で芭蕉も使っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8599x/>

理有 炎天の刀を持つ少女

2011年11月1日03時19分発行